

東日本大震災復興支援ツアーを終えて伝えたいこと

平成 24 年 11 月 3 日

愛知県知立市八ツ田町

大澤 益人（宮城県コース）

はじめに

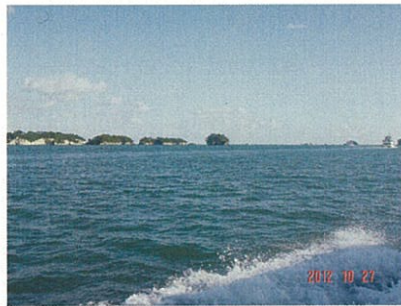
あの震災が起きた直後に、第二の人生を歩み始め微力ながらも災害対策の職に就いている。早く被災地に行き被災された方々に黙祷を捧げ、現地を自分の眼で見て次の世代に伝えたいと思っていた。丁度そのとき校友会の会報を見てこの企画に参加した。

視察と観光支援

私は宮城コースを選び 10 月 26 日（金）から前泊をして隣の岩手まで足を伸ばした。まず一瞬にして駐機していた飛行機やヘリコプターが流された仙台空港（宮城）から現地入りした。上空で犠牲に遭われた方々に黙祷した。空から見た光景は集落に襲いかかった津波の爪あとが未だに在り、物凄さを感じた。新幹線にて一関経由で気仙沼市（宮城）を視察した。気仙沼では漁船が陸地の奥まで津波で打ち上げられ、その周辺は家の土台しか残ってない無残な有様であった。しかし気仙沼駅の近くでは少しずつ復興の兆しを感じられた。復興した魚市場を訪れ、“ふかひれスープや干物など” 購入し、そのあと復興屋台村“気仙沼横丁”で食事をした。皆さんは一生懸命に復興へ立ち向かっていて、表情は明るく活気に満ちているよう見受けた。

その後、世界遺産の平泉・中尊寺「金色堂」を観光して仙台に戻った。

27 日（土）仙台駅で交友と合流、松島遊覧、五大堂、瑞巖寺など観光した。東松島はあの八百八島（本当は 280 島くらい）と言われるほどの島が壁となり大きな津波から守られ、比較的に被害が少なく済んだようだ。夕方、被災された交友と



八百八島の松島



五大堂

お会いし当時からの話を聞いた。流れた“缶詰”をボランティアの人がまだ売れるからと言って洗い、販売して工場を再建した木村社長様。“笹かまぼこ”の佐々木社長様も全壊した工場を従業員皆様と心一つにして不眠不休で働き、みごと再建した苦労話をお聞きした。事業がこのまま続けられるかとの不安がある中「懸命に従業員の雇用を守りその家族を守る」と気概、「とにかく前に進まなきゃいけない」という信念・・・を感じた。まだまだ国・県・市の行政に“現地にあった支援策”が急務だと思う。

28 日（日）南三陸町、石巻市、名取市など復興状況を視察した。南三陸町ではあの防災対策庁舎で大きな津波により危険が迫っても我が身を忘れ、最後までマイクを握り「早く高いところに避難するように」と呼びかけ沢山の命を救った娘さんへ黙祷をした。彼女のご冥福を祈り沢山の千羽鶴や献花が手向けられていた。石巻市、名取市にもまだガレキの山があらこちらにあり、国全体が協力して早く撤去をしないといけない。

学んだことそして使命と役割

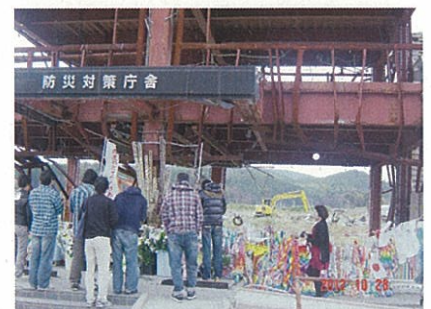
知立市主催の防災講演会で聞いた“釜石の奇跡”と言われたように、親子関係は強い絆で結ばれ、日頃から“親を待たずに高台に上がる”こと

“自分の身は自分で守る”と教え続けてきたという。3. 1 1 のときに小学生が幼い子の手を繋ぎ、おばあちゃんに“一緒に早く逃げよう”と声を掛けて全員が津波から助かることができた。

みんなが安全で安心して暮らせる街をつくり守り抜くこと、後世にこの事実を伝えることが私の使命であり役割でもあると考える。早期の復興を願っている。



被災した交友からの苦労話



沢山の千羽鶴や献花

番外編

東日本大震災復興支援ツアー最終日に杜の都路で開催された「全国大学女子駅伝」をワンセグで熱烈応援。予想通り我が立命チームは優勝した。早速、帰りの飛行機を最終便に変更して祝勝会へ飛入り参加した。フレッシュな選手と懇談して元気を頂くことができた。校歌や応援歌を声高々と歌い青春に戻ることができた。“一生青春、一生修養”をモットーの私には良い刺激になった。

また昔、大変お世話になった陸上競技部OB・OG会の村田会長様と偶然にもお会いでき“笹かまぼこ”の佐々木社長様ご夫妻とも再会でき有意義な時間を過ごすことができた。宮城校友会会長様はじめ関係者の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。



フレッシュな選手たち



佐々木社長（右）村田会長（中）小生（右）